



大砂土中だより

はっ らっ

澆 刺 と

さいたま市立大砂土中学校

048-684-8004

<http://osato-j.saitama-city.ed.jp>

No.5 平成28年 7月 1日号

梅雨空に思う

校長 清水 一司

今年の梅雨は、水不足が心配になるほど雨が少なくなっています。6月下旬になって、ようやく梅雨らしい日が続くようになりました。梅雨の雨は校庭を彩る紫陽花の葉を輝かせ、花の色を鮮やかに映し出します。紫陽花には、梅雨空がよく似合います。

この紫陽花ですが、私たちがよく見かける手まり状に咲いているものは「西洋紫陽花」と呼ばれているものです。本来の紫陽花は、額縁のように周囲にだけ花（実際に花のように見えるところは「がく」だそうです）が咲く「額紫陽花」で、日本固有の植物だったようです。それを、幕末に来日していた医師のシーボルトが、恋人のお滝さんの名にちなんで「オタクサ」という名をつけ海外に紹介し、以来、紫陽花は西洋でも親しまれるようになったという説があります。その後、紫陽花は様々な品種改良を経て、手まり状に咲く紫陽花が海外から日本に入ってきました。大人であれば、このようなことを考えながら紫陽花を眺めていれば、梅雨も愉しむことができます。しかし、生徒たちにとって梅雨は外で思い切り遊ぶことができず、決して好きと言えない時期かもしれません。梅雨入りから一月近く経過し、そろそろ梅雨明けが待ち遠しくなっている生徒もいるようです。

ところで、梅雨の雨は、米作り農家にとってなくてはならない重要なものです。雨が降らないと米作り農家は大打撃を受けることとなります。歴史を辿れば、梅雨に雨が降らないことにより一揆が起こったこともありました。ところが田の水も、ただ張ればよいというものではありません。常に田に水が張られたままの状態でいると、土の中に稲にとって有害なガスや酸が発生し、根の発育に悪影響を及ぼすため、時々水を抜いて田を干してやる作業が必要になります。これを「中干し」と言います。この作業を行うことにより、土の中に酸素が補給され、稲の根の発育が旺盛になり、再び田に水を入れた時に稲がたくさん養分を吸い込むようになるのだそうです。

本校の生徒たちは、4月の始業式以降、学習や部活動、行事等で常に力を発揮し、梅雨の雨ですくすくと育つ稲の如く大きく成長しました。この生徒たちをさらに成長させるためには、稲に「中干し」が必要なように、成長の基盤となる根を張らせる期間が必要であると考えます。現在、生徒たちは1学期のまとめに力を注いでいますが、学期末にかけての期間、あるいは間近に迫った夏休みは、2学期以降の生徒の成長を促す「中干し」となるのではないかと梅雨空を眺めながら思っています。